

学校に通うホームスクーラー： ホームスクールと非ホームスクールとの間

佐々木 司

Homeschooler Goes Out to School:
Walking a Fine Line between Homeschooling and Non-Homeschooling

Tsukasa SASAKI

(Received September 25, 2009)

はじめに—本論のねらい—

学校に行かない選択、学校に対する拒絶—ホームスクールと称される教育手段は、一般に「学校」と「家庭」とを二項対立の図式で描くフレームワークによって語られてきた。「学校の代わりに家庭で子どもを教育すること¹」がすなわちホームスクールであると説明されてきたのである。学校教育とホームスクールとを水と油のごとく分かつこの捉え方は、たしかに単純明快で受け入れ易くもある。しかし、精確ではない。なぜか。

ホームスクーラーは皆が皆学校を拒んではいないし、「家庭」という単位でのみ教育活動を行っているわけでもない。学校（学校で提供される教育サービスをはじめとする各種サービス）を利用するホームスクーラー、他のホームスクーラーと協力して独自に学習集団を形成するホームスクーラーが存在する。ところが、ホームスクーラーと「他者」（「学校」や「他のホームスクーラー」など、教育上の関係を結んだ外部エージェント）との関係には、これまで主要な関心が払われずにきた²。おそらくそれは、彼らが伝統的なかたちの学校利用者ではなく、かといって家庭内に留まって教育を行う「正当的ホームスクーラー」でもない、いわば曖昧な存在だからであろう。しかしその曖昧な存在の彼らこそ、「家庭」と「他者」との間に存在する関係の妙を教えてくれる。ホームスクールは「多面体」である。「家庭」という単位に囚われ、ホームスクールを一様な制度と見るなら、その覆いの下に隠れているいくつもの「面」を知ることはできない。

本論は、アメリカ合衆国カリフォルニア州でホームスクールを行っている家庭において、私（＝筆者）³がホームステイをしながら実施した観察および聞き取り調査に基づいて執筆するものである。ホームスクーラーは「他者」との間にいかなる関係性を築いているのか。また、その関係性はどのように変容しているのか。この点をホームスクールにおける母親の役割⁴を描き出すことで明らかにし、もって従来の定式化したホームスクール理解に修正を迫る。本論のねらいはそこにある。

1. ホームステイ調査に至る経緯

本論は、直接的には上記ホームステイ調査に基づいて執筆するものであるが、しかしその調査は、それまでに私が行ってきた研究経緯を踏まえて実施したものである。本論の理解を容易

にすることに繋がると思われるので、まずその「経緯」について述べておきたい。

1996年、今から13年前、私はカリフォルニア州でチャータースクールの校長をしている友人から、「ホームスクーラーを対象にした教育サービスの提供を開始した」との連絡を受けた。彼はその3年前に、当時まだ法制化したばかりのチャータースクールを同州内のある都市で設立した男である。その頃ホームスクールは、すでに研究者はもちろんメディアからも注目されるムーブメントになりつつあったから、私もおよそ知っているつもりでいた。「学校に行かない選択」や「学校に対する拒絶」。それがホームスクールについてなされていた説明であり、同時に私の理解でもあった。当然、次のような疑問と好奇の感情が沸き上がる。チャータースクールがホームスクールを？ホームスクールは学校とは無縁のはずなのに、一体なぜ？

私は1998年から2000年にかけて友人のチャータースクールを訪れ、ホームスクーラーへのサービスについて観察し、そして話を聞いた。関連する文献収集やネットサーチも行った。すると、この種のサービスがチャータースクールなど一部の公・私立学校で提供されていることはすぐにわかった。「学校に通うホームスクーラー」が存在し、そこに「ホームスクール」と「学校」とが混ざり合ったハイブリッドな関係、すなわち異種混交性が見られることに私は興味をもった。

チャータースクールは、なぜホームスクーラーに注目し、ホームスクーラーを対象にしたプログラムを提供するのか。それは、ホームスクールが「錬金術」になるからである。学校に入る基礎校費の算出基盤は生徒数と出席率である。したがって病気などの場合を除き、欠席する生徒が多ければそれに連動して校費は減額される。しかしホームスクーラー⁵に関しては、数週間に1度程度の割合でその間の学習状況を確認しさえすれば減額されることはない。それだけではない。在籍していてほとんど学校に来ないホームスクーラーが多ければ多いほど、学校は経費を「浮かす」ことができる⁶。

私の友人が早くからホームスクールに注目したのも、こうしたカラクリと無縁ではなかった。ただし、友人は言う。ろくなサービスを提供せず、せいぜいカウンセラーを配置して学習アドバイスをを行っているだけの学校があちこちにあるのは事実だ。彼らはホームスクーラーを千人、二千人規模で集めておきながら、たいしたことはやっていない。私腹を肥やす輩もいる⁷。でも、うちは違う。ホームスクーラー向けに提供しているサービスを見てくれ、と⁸。

私は友人の所を含め、同種のプログラムをもつ学校を計5校訪問した。ある男子生徒は、1週間に1度という最低限の取り決め頻度でしか学校に現れず、その間の学習を報告すると逃げるように去って行った。ある女子児童は、まだ赤ん坊の妹を抱いた母親と一緒に、毎日規則正しく学校に来て、一日を学校の自習室で過ごしていた⁹。学校に在籍しているホームスクーラーが学校に来る頻度や学校の何を利用するかは様々であったが、彼らはみな、来たい時に学校に来て、利用したいサービスだけを利用し、そして帰りたい時に帰って行った。学校側は彼らのことをしばしば「ホームスクーラー」と呼び、彼らもまた自分のことをそう認識していた。

学校と家庭という二者間の異種混交性を探るには、学校という一方の「空間」にだけ身を置き観察を続けても限界がある。そう感じた私は、2003年の秋、友人が校長をしているチャータースクールを通じホームステイ受け入れ家庭を探してもらうことにした。ホームスクーラー宅にホームステイをし、彼らと生活を共にしながらケーススタディを行い、彼らにとっての「学校」の意味を探ろうとしたのである。

同校に在籍しているホームスクーラーは300人近くいたので、すぐに見つかるだろうと高を括っていたが、なかなかよい返事は得られなかった。数ヶ月が過ぎ、半ば諦めかけていた2004年3

月、幸運にも私を迎え入れてくれる家族があらわれた。それがマリアたちだった。

2. マリアとホームスクールとの出会い

一家は、主婦でありホームスクールの「教師」でもあるマリア、その夫ジョン、そして4人の子どもからなる6人家族であった。夫のジョンは州政府関係の仕事をしている公務員だが、高校卒業後しばらくは陸軍で働いた経験をもつ。大学には行っていない。マリアは大学卒業から第一子が生まれるまで、州内の公立高校で2年、中学校で3年ほど教師をしていた。子どもたちは、理科が得意な長女リタ（14歳）を筆頭に、絵を描くのが好きな二女ソフィア（11歳）、リトルリーグに入って野球をしている長男ルイス（9歳）、そして少し甘えん坊の二男マシュー（6歳）である（いずれも名前は仮名、年齢は2004年3月時点）。

一家は敬虔なプロテスタントで、日曜日には所属しているバプテスト系教会に礼拝に行く。食事前の祈りも欠かさない。朝食時には、父ジョンが聖書の一節を引きながら、「今日の教え」を語る。教会で大勢の人を前にスピーチをすることもあるジョンの言葉は、ユーモアを交えながらも重みのある「教え」を毎朝家族に届けていた。

この家族がホームスクールを始めたのは、マリアがそれを強く望み、そして夫ジョンが承知したからであった。マリアとホームスクールとの出会い。それはまだ結婚前、彼女が公立中学校で教師をしていた時に遡る。

私には、義理の姉〔マリアの実父の再婚相手の娘〕がいて、彼女がホームスクールを考えていたの。その時私は中学校で教師として働いていたから、彼女の方が私に訊いてきたのね。「教師をしてるんだから、カリキュラムについてはよく知ってるはずよね。今度ホームスクーラー向けのカリキュラムフェアがあるの。一緒に来て」って感じで。こう返事したことを覚えているわ。「ええ、いいけど…。でも私はホームスクールのことはよく知らないわよ。やってみたいと思ったこともないし…」

結局彼女の方はホームスクールをすることなく、子どもたちをみんな公立学校に入れちゃったの。ずっと公立学校よ。逆に私の方がホームスクールを始めた。おかしいでしょ。義姉がやりたがっていたから私も興味をもって、それから友人や知人、教会など様々なところから情報を集めたり、実際にホームスクールをやっている人に会って話を聞いたりした。だんだん興味深く思えてきて、自分がやる可能性を考えるようになっていたわ。

義姉に連れられて行ったカリキュラムフェアで、各種の教材（テキスト、ビデオ、教具など）が様々な科目について豊富に存在すること、そしてそれらを使う、使わないといったことを含めて、とにかく親が子の教育内容や方法を主体的に細かく選択できることを、マリアは知る。彼女の興味は掻き立てられ、ホームスクールとの距離は縮まっていった。

そこへ次のような出来事が起こる。

学年末の職員会議で、8学年〔中学校最終学年〕を落第しそうな生徒たちをどうするかを検討されたの。もし落第させて中学校に残したら、学校はそんな生徒で溢れかえってしまう。ドロップアウト率だって高くなるかもしれない。残ってほしくはない、でも落第させたくもない。じゃあどうすればいいかってことで、結局、落第しそうな生徒のリストを作って、単位を与えて高校に送り込んでしまえってことになった。あの時のことは今でも忘れられないわ。高校に

入るだけの学力がないのに9年生にするってことでしょ。そんなことすべきじゃない。間違ってる。

それから間もなく、その翌年のことだけど、ある大学が作った「エイズ理解プログラム」を中学校で教えることになったの。私はその中学校で国語の教師の他にもプログラム・ディレクターをやっていて、スペイン語も話せるから、そのプログラムをスペイン語に翻訳して通訳もやってほしいと学校側から頼まれた。でも内容はあまりに露骨で生々しく、中学生にはとてもふさわしいとは言えないものだった。性的な関係や性行為のパターンがあからさまに描かれていたの。「こんなもの絶対翻訳しないわよ」って思った。他の翻訳担当者もほとんど私と同じ意見だったわ。「生徒に少し話をする機会は持つけど、エイズについてのあんな説明なんて一切しない」って。

マリアは—そして夫ジョンも—、キリスト教右派の価値観をもつ。もし自分の子どもにこのプログラムが与えられたらどうなるだろう…。子どもは無防備だ。学校で自分の席につき、言われるがままを聞き、やがて不快な気持ちになるに違いない。しかし、それが学校というもの。学びもしない、学んでもいない者と一緒に過ごさなければならないことだってある。大切なことは、自分たちの子どもをこんな環境から守ること。当時、長女リタを妊娠していたマリアは、「とても学校には通わせられない」、そう思うようになる。皮肉にも教師として学校の内情に通じていたことが彼女をそこから遠ざけ、そしてホームスクールへといつそう接近させたのであった。

長女出産を機にマリアは教師を辞めた。しばらくはいわゆる「子育て」に専念していたが、やがて二女ソフィアが生まれ長女リタが4歳になった頃から、リタに対して教える内容や教材を自分で選び、時間割に沿って教育することを始めた。マリアのホームスクールのスタートである。

3. マリアの役割

(1) ティーチャー

2004年から2006年にかけて、私はマリア宅に計3度ホームステイをした。いずれも1週間から10日程度のものであったが、その間、彼女のホームスクールのほとんどすべてを観察した。先に述べた「ホームスクールとの出会い」も、ホームステイ中に彼女から聞かせてもらった。

2004年3月。私が初めて滞在したのは、マリアがホームスクールを始めてちょうど10年目にあたる年だった。「リバーサイド・アカデミー」(仮名)¹⁰と名付けられた彼女のホームスクールは、土・日・祝日を除く毎朝8時30分に始まり、午後4時に終わるのが基本だ。そのホームスクールは学年(school year)制を敷いており、9月初旬開始、6月下旬終了で、7月と8月はホームスクールを行わない「夏休み」になっている。「時間」という点から見れば、マリアのホームスクールはまさに「学校」だった。

日々の学習は、子どもたち一人ひとりについてマリアが作成したスケジュールに沿って進んでいく。チャイムやベルが鳴るわけではないが、子どもたちはみな時間が来れば自室か共通のスタディールーム(机、ホワイトボード、書籍等が置いてある部屋)で勉強を始める。わからないことがあれば母のもとへ行き、邪魔にならないように頃合いを見計らって静かに尋ねる。この光景も通常の学校と同じだった。ただ子どもたちは、ホームスクール中もマリアのことを「ママ(お母さん)」と呼び、「先生」という敬称を使うことは一切なかった¹¹。

マリアは部屋を移動しながら子どもたちを見てまわる。スタディルームでホワイトボードを使いながら学校の先生のように教えることもあれば、子ども部屋ですぐ隣に座わって家庭教師のように指導することもあった。彼女が忙しい時は、長女リタが先生役になって妹や弟の面倒をみていた。「助かってるわ」。一番年上のしっかり者、夏休みには近くの州立大学が高校生向けに実施した理科実験講座に参加して「A」の成績を取めた14歳の長女リタを、マリアはとても信頼していた。

(2) マネージャー

表1はそのリタの学習スケジュールである。この時リタは自宅以外に、チャータースクール(火・水曜日)、マクマホンさんの家(仮名、火・木曜日)、公立中学校(火曜日)、教会(木曜日)の4か所で学んでいた。マリアのホームスクールは、家庭と学校という当初私が想定していた二者間の異種混交性に収まるものではなかった。

スケジュール帳と時計を見ながら、次から次へと子どもを連れて移動する母マリア。ホームスクールにおけるマリアはもちろん子どもたちの「ティーチャー」、つまり教師ではあったが、私にはむしろ彼女の「マネージャー」ぶりが印象に残った。特に火曜日のマリアはそうだった。

朝のラッシュアワー。彼女はチャータースクールへと車を走らせる。今年度からソフィアとルイスに、そこで提供されているバレエとスピーチの授業を取らせることにしたからだ。いずれもホームスクーラー専用の授業で、生徒数は15人ほど。その間リタとマシューを自宅に残すことはできない。そこで4人全員をチャータースクールに登録した。家を出てチャータースクールまでおよそ30分かかる。チャータースクールにはホームスクーラー専用の自習室があり、リタとマシューはそこに本やワークブックを持ち込んで自習する。マリアはソフィアのバレエ、ルイスのスピーチ、そして自習室を次々に見てまわる。

11時になると、マリアと4人の子どもたちはチャータースクールを出てマクマホン家に向かう。教会で知り合ったホームスクーラー、マクマホン夫人が、自身の子ども2人と一緒にリタとソフィアにも数学を教えてくれる。娘2人を車から降ろし、夫人への簡単な挨拶を済ませると、マリアはすぐさま帰宅。ルイスとマシューに国語と算数を教え始める。そして時計が12時を指す頃、彼女は昼食の準備にとりかかる。

12時45分。昼食を済ませると、ルイスとマシューを車に乗せ、マリアは再びマクマホン家に向かう。リタとソフィアの迎えである。そして帰宅後3時まで子どもたち4人を教えると、今度はリタを近くの公立中学校に送りどける。リタは今年度から公立中学校の部活動に参加し、そこでキーボードを練習している。自宅でピアノを弾くリタは私のような素人にはかなりの腕前に思えたが、もっと上達したい、そして(きわめて例外的だということだが)そこには優れた指導者がいるということで、中学校の楽団の練習に参加させてもらっているのである。その中学校は車で5分もかからない場所にあるので、他の子どもたちは自宅に置いていく。マリアはすぐに帰宅するが、6時には再びリタを迎えに中学校へ行く。

午後6時半。その日のホームスクールが終わり、夕食の準備に取りかかるまでの僅かな時間。キッチンでオレンジジュースを飲みながらフツと一息つくマリア。「いつもこうなの。忙しいわよ」。そう微笑む彼女のその顔は、「ホームスクール・ママ」としての充実感に満ちていた。

(3) プロデューサー

マリアの役割は、「ティーチャー」と「マネージャー」だけではない。6月下旬から9月上

旬までの「夏休み」の間、4人の子ども一人ひとりについて、9月からの教材や学習方法を決めていく。彼女の楽しみは、むしろこちらにあるといってもよい。チャータースクールの利用、マクマホン家での数学、公立中学校の部活動へのリタの参加。これらはいずれも、子どもたちや夫ジョンの意見を聞きながらマリアが決めたことである。

カタログを取り寄せたり、オンライン学習のサイトを見たり、時々開催されるカリキュラムフェアに足を運んだりしながら、「プロデューサー」マリアは、使ってみたい教材を日頃からチェックしている。義姉と一緒にいったカリキュラムフェアで初めてホームスクーラー向けの教材に出会ってから15年。マーケットは巨大化し、選択肢も増えた。何種類ものカタログを私に見せながら、「来年度は、これとこれ、それからこれも使ってみようと思っているの」と語る彼女の姿は、まるで母が子にトータル・バランスを考えながら「洋服」、「帽子」、「靴」をひとつひとつ買い揃えていく姿に重なって見えた。先ほど紹介した「エイズ理解プログラム」に対するマリアの言葉からもわかるように、学校に子どもを入れたら欲しくないプログラムまで一方的に提供され、それを受け入れざるを得なくなる。彼女はそこを嫌う。ホームスクールなら科目ごとに細かく選ぶことができるし、万が一気に入らないものがあったとしても、その部分だけを変更することができる。学校をクッキーの型抜き器（クッキーカッター）のように画一的な教育の場であると否定するマリア。彼女は自分でカリキュラムをコーディネートしながら、子どもの学習を総合的にプロデュースする。そして、それこそが彼女のライフワークになっているのである。

マリアはまた、不定期にはあるが、公共の図書館、博物館、ホームスクール支援団体が実施するワークショップ（理科の実験など）に子どもたちを連れて行く。これもホームスクールの一環であると彼女はいう。どこで何をどのように学ばせるのが子どもたちにとって良いことなのか。彼女はそれを常に考えている¹²。ホームスクールとは、親が主体的に教育内容や教材を取捨選択し、計画に基づいて行っていくこと。これがマリアのホームスクール観である。したがって実施場所は家庭である必要はなく、また他の組織が実施主体であってもかまわない。何らかの基準で線引きをして、「これはホームスクール、これはその他の学習」などと区別すること自体、意味がないことだと彼女はいう。「異種混交性」という意識もない。子どもたち4人はチャータースクールに在籍し、うち2人はそこで授業を取っているわけだが、それもホームスクールの一部として行っているだけのこと。自分たちはあくまでホームスクーラー。それがマリアの自己認識であった。

(4) ユナイター

マリアが採用している学習形態に「ユニットスタディ」がある（表1参照）。複数のホームスクーラーが小集団を形成し、互いに協力しながら教え合う学習のことをマリアとその友人たちはこう呼んでいるのだが、ホームスクーラーの間では比較的知られたものである。

マリアは2001年にこのユニットスタディを始めた。2004年3月現在、彼女は4つの家族とユニットを組んでいるが、そのうち3家族とは所属の教会で知り合い、残り1家族とは教会とは関係のない友人を通じて知り合った。いずれもマリアの方からユニットスタディの話を持ちかけた。国語やスペイン語はマリアが教え、音楽や理科、数学は友人に教えてもらっている。

表1 長女リタの学習スケジュール—2004年3月時点—

	月	火	水	木
6:30-7:30	起床、シャワー、朝食の準備			
7:30-8:00	お祈り、朝食			
8:00-8:30	朝食の後片付け、家の掃除など			
8:30-9:00	ピアノ	母の運転する車で チャータースクール へ移動	母の運転する車で チャータースクール へ移動	ピアノ
9:00-9:30	数学	自習室で勉強。その 間、ソフィアと ルイスは学校の提 供する授業を受け ている。およそ3 週間に1度、学校 側にその間の学習 報告をする。	自習室で勉強。	マクマホン家へ移動
9:30-10:00	ギター			
10:00-10:30	地理/理科			
10:30-11:45	ジャーナリズム/ 文章の書き方/個 人研究プロジェクト (オンライン学習によ る)	マクマホン家へ移動	11時過ぎに自宅へ 向かう	ユニットスタディ: 数学(11時まで)
		ユニットスタディ: マクマホン家の母 親が数学を教える。 妹ソフィア、マク マホン家の子ども と一緒に受ける。	帰宅	帰宅
11:45-12:15	昼食	昼食(マクマホン家で)	昼食	昼食
12:15-1:00	文章の書き方/自 分のプロジェクト	数学 帰宅	休憩、準備など	休憩、準備など
1:00-3:00	その都度、お使い、 フィールドトリッ プ、病院で診察、ガー デニングなどに充 てられる。	理科、地理など	ユニットスタディ: 他の4家族=子ど も12人、母親4人 が加わる。地理、 理科、図画工作な どを一緒に学ぶ。 内容によっては2 グループに分かれ て学習することも ある。年長の子ど もは年少者に教え たり、サポートし たりする。	国語、数学など ユニットスタディ: 他の3家族が加わ り、スペイン語を マリアが教える。 学習者はリタを含 めて6人。
3:00-4:00	運動(自転車・水泳・ バスケットボール などを兄弟姉妹で)	近くの公立中学校 へ移動	運動	ピアノ
4:00-6:00		公立中学校の部活 動に加わり、キー ボードを練習		教会へ移動
6:00-7:30				教会の合唱団

注1: このスケジュールは、マリアが作成していた時間割に観察内容を加筆したものである。

注2: 金曜日のスケジュールは月曜日と同じ。

マリアがユニットスタディを採り入れている理由は2つある。1つは資源の有効利用である。学習に必要な地図や事典、楽器などをすべて買い揃えれば、代金も馬鹿にならないし収納スペースも必要になる。また、親には教える上で得意な分野と不得意な分野がある。特に子どもの「学年」¹³が上がると、1人の「ティーチャー」(=親)がすべての科目を教えるのは難しくなる。そこで得意科目を教え、不得意科目を教えてもらう互恵的な関係を築く。ユニットスタディを行えば、互いに足りないものを補うことができる。

子どもに教材を与え、自習だけさせてそれで終わりというような安易なホームスクールも無いわけではない。学校に在籍してインディペンデント・スタディをやっている「ぐずぐずした人たち (procrastinator)」がホームスクーラーを名乗っている場合もある。自分がやっているホームスクールを、こんなものと一緒にしてほしくはない。マリアはそう言う。

マリアがユニットスタディを行うもう1つの理由。それは「社交の場」の確保である。ユニットスタディのためにマリアの家に他の4家族が集まる水曜日の午後は賑やかだ。ユニットスタディそれ自体もそうだが、むしろその後の1時間、表1のリタのスケジュールでは「運動」となっているその時間帯が、実は親同士ふれあいの場になっている。マリアの家の広い裏庭で、年齢の異なるおよそ15人の子どもたちが、ブランコや木登り、水泳などをして思い思いに遊び始める。その様子を見守りながらティータイムを楽しむ母親たち。彼女たちにとってそれは、価値観や教養を同じくする者同士が気軽に談笑できる、まるで「クラブ」のような時間なのである。そこでは、ホームスクールのこと、子育てのこと、最近観た映画のことなどが語られ、喜びや悩みが共有される。

こうしたユニットを積極的に形成するマリアは、ホームスクーラー同士を結びつける「ユニテーター (uniter)」である。「マリアがいてくれるおかげで話題を共有できるし気分転換にもなる。一週間をいいリズムで過ごせるわ」と母親たちは話してくれた。

4. 姿を変えるホームスクール

2004年9月、再びマリア宅を訪れてみると、ホームスクール「リバーサイド・アカデミー」はわずか半年でその姿を大きく変えていた。私は驚いた。

チャータースクールとの関係は消滅していた。子どもたちは授業をとっておらず、在籍もしていなかった。マリアはすでに同年3月の時点で、その授業は自分たちにとっては「ただのデザート」に過ぎないと言っていた。メインディッシュにならない「おまけ」程度の意味である。地元の情報誌でその存在を知り、学校見学もして決めたことではあったが、通い始めて半年が過ぎた頃には、バレーにしてもスピーチにしても週2日わざわざ30分かけて行くほどのものには思えなくなったという。

学習カウンセラーの態度も気に入らなかった。3月頃、カウンセラーは二男マシューに、成績が芳しくない、学校に通ってしっかり勉強してはどうかとかなり強い口調で言ってきたという。それをマリアはマシューから聞かされた。息子のことを何もわかっていない人が、「自分はプロフェッショナルでございます」というような態度をとったことを、彼女は許せなかった。マリアとチャータースクールとの関係は、その年、確かに互恵的ではあったが、彼女にとってそのメリットはさほどのものではなく、特に後半は負担や不満の方が大きくなっていった。それでも同じように通い続け、年度末の6月をもってそこの関係を断った。

ユニットスタディも変わっていた。4家族のうち1家族が抜け、縮小していた。その抜けた家族というのは、リタとソフィアに数学を教えてくれていたマクマホン家である。今年度はお

互いに時間が合わなくなったとルイスから聞いたが、マリアは多くを語ろうとしなかった。マクマホン家の母子3人は、ユニットスタディ後の「運動」＝「ティータイム」にもあまり参加していなかったらしい。

マクマホン夫人はマリアと同じ教会に通っているが、中国系アメリカ人で（他の3家族はみな白人）、自分の子どもには中国語も教えていたし、教材も英語で書かれたテキストの他に中国の教科書を取り寄せて利用していた。もちろんリタとソフィアには英語で教えていたが、筆算も中国式の書き方を指導していた。このようなことが影響したのかもしれない。リタは代わりに有料のオンラインサイトで数学を学んでいた。

しかし何といっても私が驚いたのは、二女ソフィアがホームスクールをやめ、フルタイムの生徒として近隣の公立中学校（リタが部活動に参加しているのと同じ中学校）に通い始めていたことだった。それは「ホームスクーラー」という言葉から想定される範囲を超えていた。「もっと多くの友だちがほしい」とソフィア自身が希望したのだという。ユニットスタディやチャータースクール、絵画教室など、同年代の子どもと一緒にいる時間帯はもちろんソフィアにもあった。しかし、それらはいずれも1時間や2時間程度の短いもので、十分ではなかったようだ。加えてソフィアは—そしてマリアも—、アカデミック教科の学力を心配していた。絵画には秀でていたソフィアだが、国語や数学などは伸び悩んでいた。

マリアはソフィアの「通学」をととても残念がっていた。学校に通うことは、彼女がやってきたホームスクールを否定することにもなりかねない。しかし、夫ジョンと話し合った上で最後は決断した。とりあえず1年、学校に通わせて様子を見ることにしたという。二男マシューの件では「専門家」ぶるカウンセラーを批判しながら、ソフィアについては学校という「専門家」にすべてを委ねてしまったことに、マリア自身矛盾を感じているようだった。私はマリアに、少し意地悪かなとも思いつつ、ソフィアのフルタイムの通学もホームスクールと呼べるのかと訊いてみた。答えは短く、しかしはっきりと「ノー」だった。

2度目の滞在から1年半後の2006年3月、私はマリア宅に3度目のホームステイをした。するとソフィアは公立中学校を1年で辞め、ホームスクールに戻っていた。中学校生活も悪くはなかったが、自分にはホームスクールの方が向いていることがわかったと話してくれた。マリアはととても喜んでいて。公立中学校の部活動に参加していたリタもそこをやめていた。結局リタは2年ほどそこでキーボードを練習したことになる。この年の「リバーサイド・アカデミー」は、「学校」との関係は一切断ったかたちで進みつつあった。

その後、私はマリアの家族を訪問していない。しかし年に数回は、お互い手紙のやり取りを続け近況を伝えあっている。マリアからの手紙によれば、ルイスが入っているリトルリーグのチームが公立中学校のグラウンドを使って野球の練習をすることがたまにある程度で、その後学校を利用してはいないし、またそのつもりもないという。一方、友人とのユニットスタディや支援団体によるワークショップへの参加は続けている。ただし、メンバーの一部や参加プログラムの種類は毎年変わっているという。

5. 考 察

マリアは、ティーチャー、マネージャー、プロデューサー、ユナイターの役割を果たし、彼女のホームスクールは毎年変化していた。「他者」との間には互恵的な関係が築かれていたが、根底では彼女の主体性が大きく関与していた。

マリアは、他者に子どもの教育の全部を委ねることを良くないことだと考えている。しかし

その一部が「他者」によって提供される教育で賄われることについては、自分が主体的にその教育を選択する限りにおいては十分な価値を認めている。リタの部活動は自分たちのホームスクールの一環だが、ソフィアの公立中学校通学はホームスクールにはならない。ホームスクール・ママであるマリアにとって圧倒的に重要なことは、家庭という場所でもなければ自分がティーチャーとして教えることでもない。親としての自分が子どもの教育に主体性を発揮できるかどうかなのである。

次のように喩えることができるだろう。「洋服」、「帽子」、「靴」のすべてが既製品であっても、それぞれをひとつずつ自分で買い揃えることができれば、それはマリアを満足させる（もちろん自分で「手編みのセーター」を作ってもよい）。しかし、「洋服」、「帽子」、「靴」がセットで販売されていて、必ずその3点を買ひ、その通りに身につけなければならないとしたら、彼女はそれを拒む。

自分がティーチャーとして教えることがまったくなくても、マリアは子どもの教育をすべて自分で選べば満足するはずである。事実、高学年に達している長女リタにマリアが直接教えるということは、もうほとんどなくなっている。逆に、いくら最終的な判断を自分が下したとはいえ、学校という「他者」にすべてを委ねることを意味するソフィアの公立中学校通学は、マリアの価値観と相容れるものではない。

やり手「プロデューサー」であるマリアが、家庭の外に豊富に存在する教育の機会を選べば選ぶほど、スケジュール管理や送り迎えという「マネージャー」としての仕事は増す。物理的にも経済的にも、自分が頑張れば選択可能な範囲にそれがあることを知っているからこそ、彼女は懸命になる。

マリアの主体性は、ホームスクールの見つけ直し作業でも発揮される。ある関係は更新され、ある関係は断たれる。いずれの関係もイーブンとは言えないまでも互恵的であり、互いに迷惑をかけない「1年」という長さを基本の単位としている。また子どもの学年が上がれば「ティーチャー」にはそれだけ高い学力が要求されるし、一家庭だけで教材を買いそろえることも容易ではない。価値観を共有できる仲間との交流の場も欲しい。マリアは「ユニタター」となって他のホームスクーラーとの関係を築き、ユニットスタディを設える。

私は、マリアが最も学校に接近した時期に彼女と出会った。それまで学校をまったく利用していなかったマリアは、積極的なホームスクーラーとして「他者」との関係の拡充を図るなかでチャータースクールの授業を選び、リタを公立学校の部活動に参加させた。しかしソフィアの公立中学校通学は、ホームスクール・ママとしての存在を自己否定するかのような思いでしかたなく認めたものであった。

もともと私は学校と家庭という二者間の異種混交性に興味を抱いたわけだが、マリアという母親のなかにも、ホームスクールと非ホームスクールというアンビバレントな「異種混交性」を見たような思いがした。

おわりに

以上、本論ではマリアという母親に焦点をあてながら、ホームスクーラーが「他者」との間に築いている関係性とその変容を描き出した。彼女のホームスクールは毎年その姿を変えていたが、それは「多面体」であるホームスクールの「面」そのものが変化することを意味するものであった。その変容は、新たな食物を探し求めそれを吸収することで命脈を保つ生物のように、ホームスクーラーとして主体的に生きていくための絶えざる革新であると私には思えた。

マリアは活動的で主体的であり、またそうあり続けようとするからこそ、「他者」との関係を選択的に築き、そしてそれを断つ。

ホームスクールが変容するものであるなら(もちろん、すべてがそうだとするつもりはない)、今後は、個別ホームスクーラーの中・長期的な実態把握とその蓄積とをもって、ホームスクールを類型化する作業が必要になるであろう。

なお、私はマクマホン夫人やチャータースクールのカウンセラーのように、マリアが関係を解消した相手側の言い分については十分なデータを入手しなかった。もしそれがあつたなら、彼ら、すなわちマリアからみた「他者」の側からもその関係性を描くことができただろうし、マリアの側から描いてきた私の記述も多少違ったものになったかもしれない。この点を銘記するとともに、今後の課題としたい。

注

- 1 例えば次の事典の“home schooling”の項における、「学校の代わりに、家庭で子どもを教育する定型的な教育」という定義。Harlow G. Unger, *Encyclopedia of American Education*, vol. II, Facts On File, Inc., 1996, p.478.
- 2 例えば以下に示す論文のようにそのことに言及した文献も若干存在するが、本論が意図するような関係の実態を描いたものは、管見の限り見あたらない。Evan T. Yeager, *A Study of Cooperation Between Home Schools and Public and Private Schools, K-12*, Unpublished Doctoral Dissertation, Texas A & M University-Commerce (UMI/ProQuest Digital Dissertations), 1999. Patricia M. Lines, “When Home Schoolers Go to School: A Partnership Between Families and Schools,” *Peabody Journal of Education*, Vol. 75, Issue 1 & 2 April 2000, pp.159-186. Maralee J. Mayberry, Gary Knowles, Brian Ray, Stacey Marlow, *Home Schooling: Parents as Educators*, chap. 5, “The Relationship Between Home Schools and Conventional Schools,” Corwin Press, 1995 [秦明夫・山田達雄監訳『ホームスクールの時代』東信堂、1997年、第五章 ホームスクールと学校の関係]。
- 3 本論は、異文化としてのホームスクールを「私」(＝筆者)というフィルターを通してエスノグラフィックに描いたものである。観察、質問、記述、解釈の主体はいずれも「私」(すなわち論文の筆者である以前に、一介の研究者としての私自身)にあり、そのことに自覚的でありたいとの思いから、通例学術論文では用いられない「私」という表現をあえて用いる。
- 4 なお、ホームスクールを行っている母親に言及した次のような先行研究もあるが、これらは実際の役割を描き出したものではない。Mitchell L. Stevens, *Kingdom of Children Culture and Controversy in the Homeschooling Movement*, Princeton U.P., 2001. Wendy McElroy, “Can a Feminist Homeschool Her Child?,” *Ideas on Liberty*, Feb., 2002.
- 5 カリフォルニア州が州法で正式に認めているのはホームスクールではなくインディペンデント・スタディという学習形態である (Cal. Education Code Section 51745-51749. 3)。通常の学校に通っていたものの、その環境に適應できない生徒がオルターナティブとしてこれを選択するケースが多い。しかしそれまで学校にまったく通ったことがないホームスクール家庭の子どもが、ある年このプログラムに在籍してくることもある。学校側はホームスクールとインディペンデント・スタディとを特段区別していないが、唯一、私の友人が校長をしているチャータースクールだけが、両者のプログラムを完全に分けていた。
- 6 この仕組みは、学校に通いたくない生徒、学校との間に距離を置きたい生徒にも都合がよ

い。気兼ねなく学校を休むことができるからである。ただし「休む」といっても「欠席(absence)」ではなく、少なくとも建前としては家庭等で学習する、ということになっている。

- 7 チャータースクールが採用しているホームスクーラー向けプログラムに関係した不明朗な校費の流れは、州内の新聞でもたびたび報じられるほど社会問題化している。校長個人が着用したケース、チャータースクールを運営していた民間企業が不当に利益を得ていたケース、カトリック信者のホームスクーラーにチャータースクールから教材購入費が支払われ、信者がそれでカトリック関係の書籍を購入したケースなどがある。
- 8 ホームスクーラー向け授業（バレエ、スピーチ、スペイン語、国語、算数、体育など）、学習アドバイス、ホームスクーラー向け書籍・雑誌・ビデオの貸し出し、コンピュータ（インターネット環境）・自習室・ラウンジの利用など。これらのサービスをまったく利用しないことも可能である。ただし最低3週間に1度は来校し、学習カウンセラーにその間の学習状況を報告すること、公立学校在籍生徒に課されている州内統一テストを受けることが義務づけられている。なお、このチャータースクールには通常の通学生（7-12学年）も400名程度いる。通学生用授業のうち、教室の収容力の問題がないものについてはホームスクーラーも履修希望を申請することができる（ただし希望者はほとんどいない）。
- 9 その母親は次のように言う。「小学1年生の娘をスクールバスに乗せることは心配だし、子どもにも負担なこと。長時間になるし上級生だって乗ってくる。バスには運転手しかいない。それにバス停まで連れて行かなければならない。ほら、私には小さな赤ちゃんがいるの。だからホームスクールにしている。時間に縛られないし、赤ちゃんと一緒に連れてきたっていいんだから。」この母親は、彼女が通う学校内に自習室という「親と子の居場所」が設けられていることをとても喜んでいて。
- 10 マリアが自身のホームスクールにこのような名前を付けたのは、かつて州教育局に対して自身のホームスクールを私立学校として届け出た際のことである。「学校にまったく在籍していないで行うホームスクールは違法である」との見方を示す学区関係者も少なくない。そこでマリアは自分のやっているホームスクールが違法だと言われる方が一の事態を考え、ホームスクールを私立学校ということにして学校名をつけて届け出たのである。これはホームスクーラーの間でよくやられていることだが、友人たちはこの届け出をしていないことを知り、またそうしなければ正当性を主張できないこともないと判断して、その後は届け出をしていない。彼女は私に、当時業者に注文して作ってもらったという「リバーサイド・アカデミー」と刻印されたゴム製スタンプを机の引き出しから取り出し、押印して見せてくれた。しかし子どもたちは誰ひとり、自分たちのホームスクールに「名前」がついていることを知らない。
- 11 ちなみに、観察者である私には敬称を使っていたし、マシューがつい使い忘れた場面ではきちんと使うようマリアは指導していた。
- 12 ホームスクーラーは社交性に問題があるのではないか、ホームスクールは一風変わった人がやるのではないか。このような印象をもつ人も少なくない。この種のホームスクール観にマリアは辟易としていた。あるとき、マリアと子どもたちが博物館を訪問することがあった。特別に時間を割いて自分たちの質問に答えてもらえるかどうかを、マリアはリタに電話で丁寧に尋ねさせた。訪問後は4人の子どもとマリアとで礼状を書いた。「これほどあちこちに出かけ、人と接し、子どもにも礼状を書かせている。自分たちの社交性のいったいどこに問題があるというの？学校に通っている子どもたちはこんなことしてる？」-彼女は笑っていたが、その目は怒りの感情を顕わにしていた。

- 13 マリアとその仲間たち、みな子どもをいずれかの「学年 (grade)」に配置した上で教育活動を行っている。この点でも一般の学校と同じである。